

## 「V類S組微分積分学第一への学生諸君の感想」について私の感想

総論：時間が十分あったのか長い感想が多く書き写すのが大変であった。多くの注文があったがそれらに対する私の考えを少々述べることにする。

講義内容も進度も去年度のI類に対するものとほぼ同じだったはずだが、諸君の感想はそれとは大いに異なるように思われる。これは何故か？制度的に違うのは

(i) 講義室の大きさの違い、(ii) 演習のあり方の違い、だけだと思われる。

(i) については講義中も諸君から特段の要請がなかったと思っているのだが、後期はマイクを使うつもりである。しかし、聞こえないのはまずいから、数回の講義後にマイクを使って欲しいと、何故言わなかったのだろうか？不思議である。(ii) はI類では1名の助手と2名のTA以外に1名の教務補佐員が(試行的に)配置されている。その結果、採点の負担をそれほど気にせずに、小テストやレポートを頻繁に実施できるし、問題は全て講義者が考えた。しかし、演習の実施法については再考する余地が多いとは長らく感じている。

『声が小さい、マイクを、早口』『説明する時、黒板に書きながら話すとき、良く聞こえない』— これへの対策は上に述べた。

『板書の文字をもっと読みやすく』『書く黒板の順番を決めておかないと消されて慌てる』— 確かに板書はうまくないと思うし、雑な板書の分、スピードはあるかもしれない。

『前回の講義の復習をやる必要はありません』— 復習無しを想定してよいならば、時間的に幾分余裕ができるし、板書を丁寧に書ける時間がとれるかもしれない。しかし、週1回の講義では間が空きすぎているため、復習をしなければ分らなくなる人が多くなると判断している。

『講義よりも演習の方が役に立っていた』『抽象的すぎてあまりよく理解できません、もっと具体的な問題に触れさせてほしい』— 実戦とはそうしたものであるが、君たちは一兵卒ではなく指揮官として囑望されているのでは？ところで、演習で出された問題の何割を自分で解いてみたのだろうか？「抽象と具体」とは一体何なのか？そもそも考えること自身が極めて抽象的な行為でもあるのだが。

『ノートをとるという行為がフェティシズム』— と何故私が書いたか。もう一度その文節の近辺を読み直し、君自身がどの程度自分の取ったノートを見返しているか考えてみて欲しい。講義録に書かれていない部分のみをメモすればより楽に講義に集中できる。参考書を指定したり、講義録をHPに載せたりし、講義中に質問し、参加することを奨励しているのだが。

『予習しないと全く分らず苦労しました』『講義録はいきなり式が出てきて、何がしくてその式を使うのか分らない』— だからこそ、HPに講義内容予定と講義内容、講義内容 revised、を載せたのだが。私としては式で書く理由を随分説明したつもりなのだが。

『難しい所ほど、楽しそうにガンガン解かれていく』『後半やたらとスピードが上がった』— これはもう一度考え直さねばならないが、総時間数がいかにも足りない。何しろ誰かが質問すれば必ず答えていたはずだが、どうして質問するなりしてスピードを止めなかったのだろうか？

『後から上書きする形だと少々混乱する』— これについては私がHPの言語をもう少し勉強すれば解決するだろう。

『(他の教科の)期末テストは一週間も前に終わっていた』— これは3時間の試験を設定するための措置である。

最後に「老人へのエール」或いは「からかい半分」なのかを少々：『HPプリントも活用、HPの講義録には非常に助けられた』『教科書も僕らが無意識に考えさせられるところがあり非常に好印象』『生徒が理解できるように、分らない人に手を挙げさせるといった等の工夫』『一瞬でも気を抜いたらすぐわからなくなってしまいう授業、授業中に問題を出して考えさせるというのが集中力が切れそうなときにとても役に立ってくれました』